



スクミリンゴガイの増殖ぶりを見て思うこと

ゆきなり まさあき
行成 正昭(友の会会長)

皆様もスクミリンゴガイというタニシを大型にしたような巻き貝を、用水路などでしばしばご覧になっていることでしょう。この貝、普段はタニシのように水中に棲んでいますが、卵は水面上の岩やコンクリートの壁、畦、植物の茎などに産み付けるのでよく目立ちます。濃いピンクの2cmほどの卵塊状で、この中に500前後もの卵が詰まっています。2週間程度で孵化すると植物なら何でも貪り食って、半年で子どもの拳くらいの大きさになります。孵化後、わずか2ヶ月ほどで卵を産むまでに成長します。このように繁殖力が旺盛なことから、飼育が容易なことに輸入業者は着目しました。

この南米の熱帯～亜熱帯原産のスクミリンゴガイ(別名ジャンボタニシ・和風エスカルゴ)は1970年代後半から80年代に食材として、東南アジアに導入されました。我が国へは長崎の業者が台湾から輸入したのが最初とされています。その後、何度か輸入され九州を中心に西日本各地で養殖が行



小河川に多発生したスクミリンゴガイ
徳島市助任本町 2000.8.8

われるようになり、最盛期には500箇所もの養殖施設ができたといわれます。しかし、「サザエとアワビをたして2で割ったおいしさ」との触れ込みにもかかわらず、思ったほどの需要が伸びなかったようです。また今のところ本土では発見されたことはありませんが、人体に経口感染し、好酸球性脳脊髄膜炎を引き起こす広東住血線虫の中間寄主になりうるという報道もあって、1985年頃には殆どの業者が廃業してしまいました。野生化した貝は水田生態系内にも侵入して、移植後2～3週間までの幼苗が加害される事例も生じるようになったので、1984年には農林省はこの貝を有害動物に指定し、輸入も禁止されました。徳島県においても、1981年頃から養殖が行われるようになりましたが、他県同様1985年にはすべて

の業者が養殖をやめてしまいました。しかし、野生化した貝が1985年に北島町の水田と付近の用水路で確認されたのを皮切りに、翌年には分布をひろげ2市3町の水田、ハス田、その付近の水路、河川でも見かけるようになりました。県ではリーフレットを作成し、広く注意を喚起するとともに早期発見と適切な駆除の推進を呼びかけました。

市町村によっては地域ぐるみで貝を捕殺したり、用水の壁面や植物に産み付けられた卵塊を水中に落としたり、田で越冬している貝の密度を下げため晩秋から冬期にかけて2～3回ロータリーで耕起するなど防除に努めました。水田ではI B P粒剤や石灰窒素等数剤が登録認可され、化学的防除も行えるようになり、総合的な対策もとられたため現在まで稲やハスでも大きな被害は発生しておりません。しかしながら、本県では低湿地、うなぎ養殖などの不振で使用されていない池が多く、また用水路などは防除するのが困難であ

るため、水路に沿って徐々に発生面積は広がりつつあります。南は阿南市北の脇、西は穴吹、美馬町まで生息が確認されております。

人や物資の移動に伴って、人知れず忍び込む生物的侵入も最近増えつつありますが、スクミリンゴガイの場合は、かつて食用として輸入されたウシガエル(食用ガエル)の例とよく似ており、意識的に導入されたのですが、役に立たないということで捨てられたり、逃げ出したりして野生化したケースです。少し前、岡山県倉敷市周辺でヌートリアによる農作物の被害があり、奨励金を出して捕獲作戦を実施している模様がテレビで放映されていましたが、これも優良な毛皮生産の目的でアルゼンチンから輸入し、飼育したものが逃げ出して自然繁殖するようになった例です。奄美大島やハワイで問題化しているマングースも同様で、あげていけば枚挙にいとまがありません。

しかも最近珍獣ブームが続き、海外から様々な動物が輸入されております。生態系や生物多様性の保護をめざした規制がないので、野放しに近い状態になっているようです。それらの中には適正な管理が出来ていないため逸出し、国内の生態系を乱しているケースも見受けられるようになりました。新たな感染症を輸入してしまう危険性も伴います。いずれも人間の身勝手さにこれらの生物が振り回され翻弄された例です。

一旦進行してしまうと侵入生物はインペーターとして地域生物相に大きな打撃を与え、その後修復することは殆ど不可能です。これはまさに深刻な環境問題です。我々の自然に対する働きかけは慎重が上にも慎重に対処すべきであることを教えてくれているようです。自然を大切にすることは、我々人類の発展のために負わなければならない道義的責任であり、これを怠ると我が身に降りかかることを肝に銘じておかねばと思います。



スクミリンゴガイの卵塊
鳴門市大津町木津 2003.7.12

友の会行事報告

自然体験 お米をつくってみよう



稲刈り体験に参加して

とりのみ みほ
鳥海 美保(友の会会員)

今回、博物館の友の会行事である稲刈り体験(10月25日〔土〕)に参加させて頂きました。毎日の食事で欠かさず口^こにしている御飯^{ごはん}ですが、そのお米のできるまでについて、正直言ってよく知らなかった私にとっては大変興味のあるテーマでした。私は博物館主催のこの一連の稲作体験には、今回が初めての参加だったのですが、既に自然農という方法で栽培されていると聞き、「なかよし田んぼ」と名付けられたその場所に着くまで、すごく楽しみでした。

なかよし田んぼに到着すると、竹が何本か置いてあります。何に使うのだろうと不思議に思っていると、皆んなで稲架^はを作るとの事。刈り取った稲藁^{いなわら}を順々にここに架^かけていくのだそうです。「そういえば、昔の田んぼではよくみたなあ」等と懐かしい風景を思い出しながら、見ていました。

次に、いよいよ稲刈り本番ということで、鎌の準備に取りかかりましたが、その前に大昔の稲刈りについて教えて頂きました。その頃は石の庖丁^{ぼうちよう}を使って稲を刈っていたとのことで、私たちも石庖丁の体験をさせて頂いたのです。しかし、当然(?)のことながら、研いであるとはいえ石ですから刈り味は今一つ。古代の人々の稲作は何て大変だったのだろうと、身を以て感じる事となりました。

結局今回は鎌を使って稲を刈りましたが、前夜からの雨の影響で、田んぼの水が全部抜け切らなかったために、足元がぬかるんだ状態での稲刈りとなりました。私たちも、各々長靴を用意して臨んだのですが、ぬかるみに足を取られ、な

かなか次の1歩が踏み出せません。私も、一緒に参加した小学2年の長男、幼稚園年少の長女も、最後には泥だらけになってしまいました。それでも2人は、足元が田んぼに沈んでいく感覚が面白く、夢中になって稲刈りを楽しんでおりました。

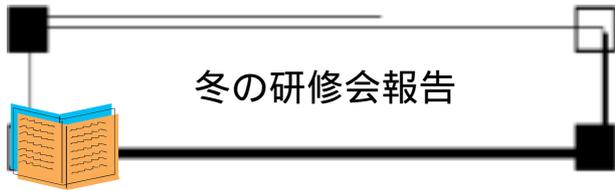
子供たちは、御配慮を頂き、背丈の低く刈り易い稲を刈らせていただきました。その他の、品種あけぼの、黒米、古代米などは手分けをして、参加された皆様全員で、てきぱきと、刈り取っていきました。そして全部の稲が刈り取られ、稲架に掛けられた時、何とも言えない達成感と満足感を感じ、心地良い爽快感^{そうかい}を感じました。

お米は、毎日の食卓で当たり前のように口^{くち}にしている、最も馴染みのある食べ物だと思います。現在でも稲作を営まれている農家の方々には、様々なご苦労があると思いますが、今回体験させて頂いた、いにしへの稲刈り体験1つを取り上げても、私たちの先祖が稲作にかけた苦労や情熱の一端でも身を以て感じる事ができたような気がします。あれから子供たちも、毎日御飯を残すこともなく、お米に感謝しながら食事を頂いております。この体験は想像以上に大きな印象を小さな心に刻み付けたと思います。

最後に、学芸員や一緒にご参加された他の方々^たに御礼を申し上げます。とても楽しく、貴重な1日となりました。どうも有難うございました。次回も引続き参加したいと思っております。



石庖丁で収穫したよ!



冬の研修会報告

「晩秋の土佐路を訪ねて」に参加して

おかじま こ
岡島 ふみ子（友の会会員）

11月22日、23日の1泊2日の研修旅行に参加する事ができ、期待に胸ふくらませていました。

1日目の横倉山自然の森博物館は、狭い道を入れて行くと山の中に“えつ”と思わせる素敵な建物に出会いました。あの世界的に有名な安藤忠雄氏の設計によるものでした。山の風や木の香りを感じつつ入り口へと導いてくれる建物でした。博物館の中に入ると、この横倉山の生い立ちや、アカガシ原生林の神秘的な展示に見入ってしまいました。

この山は地球の歴史を知る上でも非常に重要な山だそうです。又、植物学者牧野富太郎博士の研究した山でもあったようです。

ごだいさん
五台山にある牧野植物園、記念館へも行くことができました。記念館の周りには、沢山の草木が植えられ茨木学芸員さんの説明を受けました。参

加された方の中には植物に大変詳しい方もおられ、熱心にメモされていました。

記念館には、博士の収集した膨大な蔵書や綿密に描かれた植物画が展示され、その偉大さに魅せられました。

2日目は唐浜どうのはまでの化石採集でした。小高い山に向かって上がって行くと山肌に貝の化石が埋まっているようです。今から約200万年前に推積した地層だそうです。土の壁なので簡単に取れるのかと思っていましたが、なかなか歯が立ちません。中尾学芸員さんが「上の方で探す方がいいですよ。」と教えて下さったので上へ行って拾い、「これですか」と尋ねるとそれは化石の外側ということでした。しかし私の机には化石として飾ってあります。初めての体験で子どもの頃にかえったおもいでした。

今まで、こういう機会もなく本当にうれしい、楽しい旅行でした。色々な事に知識もなくはずかしいおもいですが、これから興味を持って勉強したいと思いました。本当に有意義な2日間でした。ありがとうございました。



室戸岬にて集合写真

研修旅行を振り返って

ことう けんじ
古東 謙司(友の会事務局)

中学校の教育現場から全く未知の世界に異動、友の会事務局を担当してはや1年が経とうとしています。何もわからずうろたえていた年度当初、おそらく博物館職員のみなさんや友の会会員のみなさんにしては『この春来たあのおっさんは、なんもわからんやっちゃんあ。』とあきれていたことでしょう。

思いおこせば、ようやく自分の居場所が見つかりだした7月上旬、大三島美術館探訪の下見に大橋学芸員と同行しました(これも上司の上野係長からの指示があるまで全くわかっていない)食事や値段の交渉までするなんて思ってもみないこと。友の会役員のみなさんや参加者の会員の温かい支えがなければ一体どうなっていたことやら・・・

学校で遠足や修学旅行引率で一番気になるのは人員点呼。バス乗降、出発時には気の休まることはありません(万が一、乗り忘れては大変です)。友の会の研修も同じ心配はありましたがそれは全くの杞憂。夏の大三島では、乗務予定になかったバスガイドさんがすべて確認してくれ、冬の高知では2日間に渡り、役員の方Kさんが一手に人数確認を引き受けてくれました。Kさんの「大概そろとうようなけん、行かんでかい。」(本当に揃っているんやろか?)のことは車内が和んだものでした。

活動の様子を写真に収めようと一所懸命フィルムの入っていないカメラのシャッターを切り続けたこと。

下見とは異なる交通状況にうろたえながら、『まあ事故さえなきゃどうにかなるわい』と開き直ったつもりでも時計とにらめっこ。

顔を覚えてなかったのが全く関係のない観光客に、「友の会出発しますよ。」(不審者扱いされた)



唐浜にて化石の採集

電話連絡で描いていた食事と現実をみて愕然としたこと。

振り返れば失敗の数は枚挙に遑ありません。

さて、来年度はどのような行事が待っているのでしょうか。今年度の失敗を礎に、来年度はどのような配慮ができるのでしょうか。(プロ野球の世界のように契約更改があるならば、来年度は大幅ダウンか自由契約かもしれませんが...)でも一見神経質そうに見えても呑気がベース。どうにかなるさとやっていくんでしょな。今回に懲りず、来年度もよろしく。



室戸海岸で植物観察

友の会行事報告

第11回園瀬川探検に参加して

くわうち たかし
桑内 隆（友の会会員）

「^{そのせ}園瀬川の源流を訪ねて」というテーマで10月26日（日）の秋晴れに、^{さなごうち あさひ まる}佐那河内村・旭ヶ丸を目指しました。園瀬川は徳島市の平野部を流れる川で、元来は現在の^{つめた}冷田川に近い流路であったが、^{はちす かいえまさ}藩主蜂須賀家政の命により灌漑用の^{ほっけ}法華川に変更し、今ようになったと云われています。

実質的な出発地は、佐那河内村のネイチャーセンターで^{おおかわら}大川原牧場を経て旭ヶ丸へ、ここで昼食をとり、その後周辺を散策、探訪しました。このコースは午前・午後各2時間の計4時間ほどの山道歩きでしたが、険しいところはなく楽でした。

ネイチャーセンターの駐車場には、岩石の層が崖になっており、赤色をしたチャートだと教えてくれました。それは殻を持つ太古の小動物が海底に^{せきてっこう}堆積し化石になったもので、赤色は赤鉄鉱の色によるものだそうです。山中の目の崖が大昔には海底であり、プレートの運動で運ばれてきたといわれても、実感としてはピンとこずただ感心するばかりです。

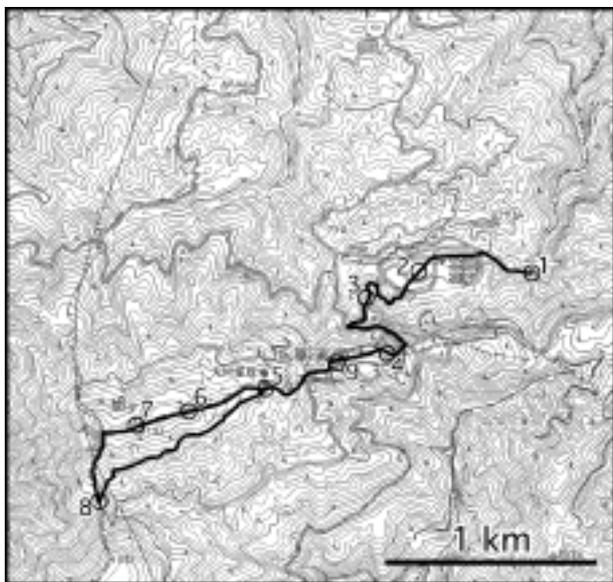
大川原牧場までの道筋には、「ドウダンツツジ」

が植えられており、紅葉の盛りでした。こんなに多くが真っ赤になっているのを見るのは初めてで見事なものでした。気候、温度などが合わなければこれほどまでにはならないそうです。私は、山野に自生していると思っていましたが、現在ではほとんど無いとのことでした。

この一帯の動物としては、イノシシ・シカ・キツネなどがいるそうです。昔から徳島にはタヌキは多いがキツネは少ないと思っていたので意外でした。「徳島県の絶滅の恐れのある野生生物」の本では、キツネは1978年以後生息が確認されているが、現在の生息数は不明とのことでした。途中でシカの^{ふん}糞があり子どもの頃飼っていたヤギの糞とよく似ていました。自宅の屋敷が里山そのものなので、イノシシ・ウサギ・イタチなどは時折見かけますがシカはその気配もなく、糞を見るのは初めてで珍しいものでした。

大川原牧場の一角に風力発電所の風車が1機ありました。他所で遠方から見たことはありますが、際にまで寄るとその巨大さに驚き、発電力が案外多いことを知りました。環境問題などで水力・火力・原子力どれもが制約ある中で多様なエネルギー活用の1つであると感じました。

いよいよ、当日の目的地である園瀬川の源、旭ヶ丸。ここは標高約1000mで神山町・上勝町・



園瀬川探検 第11回 ルートマップ

（国土地理院 1 / 25000 地形図「阿波三溪」を使用）

2003年10月26日実施

行程 6.9 km

- 1 いきものふれあいの里ネイチャーセンター（出発・終点）
- 2 芝生広場、ニホンジカの糞
- 3 キツネの巣穴跡
- 4 ヒルトップハウス
- 5 風力発電所
- 6 展望台
- 6 旭ヶ丸（標高 1019.5 m）
- 8 お不動さん
- 9 大河原高原ふる里村（売店）

佐那河内村の接点にあたるどころです。頂上は一面「アワミツバツツジ」の群生林ですが、この近縁種には「トサノミバツツジ」・「オンツツジ」があり、ちょっと見ても区別が難しいそうです。花の咲いているとき見てみたいものだと思います。頂上から少し降りたところの平場に、古い石碑と墓があり、今も花が供えられて手入れがされていました。その場所が^{かみやま}神山・^{かみかつ}上勝・佐那河内を結ぶ旧街道の交差点にあたり、むかしはここで物産の市が開かれていたと聞きました。

ここから帰路につきました。初めての行事参加でしたが係の方々のお世話と説明などで安心して面白くしかも勉強になりました。おかげで郷土の文化と自然を話せるインタープリターに一歩近づいたのかもしれない。

博物館紹介 23



鳴門ガレの森美術館

^{えのもと}榎本 ^{しげる} 繁 (ガレの森美術館長)

鳴門ガレの森美術館は、平成 13 年 11 月 3 日に鳴門市の妙見山公園内に開館いたしました。

美術館では、常設展示室において、フランスにおけるアール・ヌーヴォー期の代表的ガラス工芸作家エミール・ガレ(1846-1904)の作品を中心に、ドーム兄弟、ミューラー達の作品を季節・企画等



鳴門ガレの森美術館



美術館入口ホール内

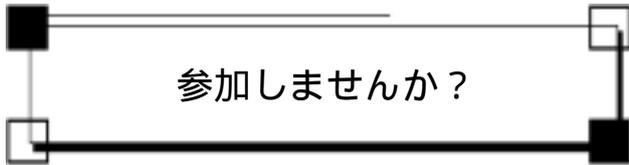
にあわせて展示、公開しています。企画展示室では、毎回ガレの森美術館独自の選考により、話題性のある企画展示を続けています。

また、レストランミイオ・ミイオに1度お立ち寄りください。そこでは、鳴門大橋から淡路島が一望できる180°パノラマになっており、そこで過ごす一時には時間を忘れさせる素晴らしさがあります。秋に行われたレストランのアートウェディングでは、今までにはないウェディングスタイルを提供したことにより大きな反響を受け、この形を定着させるべく頑張っております。既存の美術館へ移設レストランという枠組みを越えた、新鮮味あふれるレストランをめざしています。

これからも鳴門ガレの森美術館では、地域の皆様の癒しの場として、また誇りを持っていただけるように努力してまいります。

鳴門ガレの森美術館

開館時間	午前 11 時 ~ 午後 8 時	
入館料	大人	800 円
	高校・大学生	500 円
	中学生以下	無料
	団体割引あり (20 名以上 20%引き)	
休館日	毎週木曜日 年末年始	
所在地	鳴門市撫養町早崎字北殿 149	
	088 - 684 - 4445	



『とくしまミュージアムスタンプラリー』

徳島県内には、現在46カ所の博物館施設があります。『とくしまミュージアムスタンプラリー』は県内の博物館施設を巡って展示を鑑賞し、各館のスタンプを集めれば「完走賞」・「地域賞」の商品をゲットするチャンスが得られます。「完走賞」は期間内に県内46館すべてのスタンプを集めれば、5000円相当の商品券が、また「地域賞」は期間内に県内4エリアのうち1エリア全館のスタンプを集めれば1000円相当の商品券が抽選で当たります。ちなみに徳島県立博物館は東部南エリアになっています。

詳しいことは、徳島県立博物館内、徳島県博物館協議会(TEL088-668-3636)までお問い合わせください。

ボランティア活動に参加してみませんか！

博物館普及行事にボランティア導入を進めて2年目。本年度は

- こどもの日フェスティバル(5月5日・7名)
- アイヌの楽器ムックリを作ろう
(7月27日・3名)
- アイヌ文様でコースターをつくろう
(8月17日・4名)
- ドングリゴマを回そう (11月3日・4名)
- 一宮城を歩こう (1月18日・2名)
- 古墳見学 (3月21日・未定)
- 池田を歩こう (3月28日・未定)

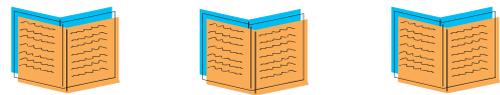
の7行事で友の会会員にボランティア参加をお願い

いたしました。

こどもの日フェスティバルの他の行事では、事前に現物を使い、あるいは現地で研修を行いました。ボランティアとして参加された方々の細かな配慮に感心すると共に、当日の責任感あふれる行動に改めて感動しました。すべての行事が大きな事故もなく、実り多い行事になったのもボランティアの方々のおかげと感謝申し上げます。

来年度も、本年度同様いくつかの行事でボランティア活動に御協力をお願いすることになります。会員の皆様には、改めて毎月の催し物案内と同封しお送りいたします。御協力よろしく願います。

(人気のある行事では、ボランティアとして参加希望出されると確実に行事に参加出来ます。・・・会員としてのウラワザです。)



.....《事務局からのお知らせ》.....

平成16年度の会員を募集しています。会員の皆様にはぜひ御継続くださいますようお願いいたします。

また、来年度から会員募集チラシが新しくなります。従来のものと比較すると、大幅にカラフルになり、わかりやすくなります。現在印刷中の新しいチラシは、完成次第会員の皆様に数部お送りいたします。会員の輪が広がりますよう、この新しいチラシを利用していただき、お友達や同僚の皆様にも友の会入会を呼びかけていただければ幸いです。

第24号

2004年2月10日 発行：徳島県立博物館友の会
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館内
TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197

No.24

徳島県立博物館友の会会報

アワーミュージアム

February —
Tokushima
Prefectural
Museum

